

都城市教育研究所

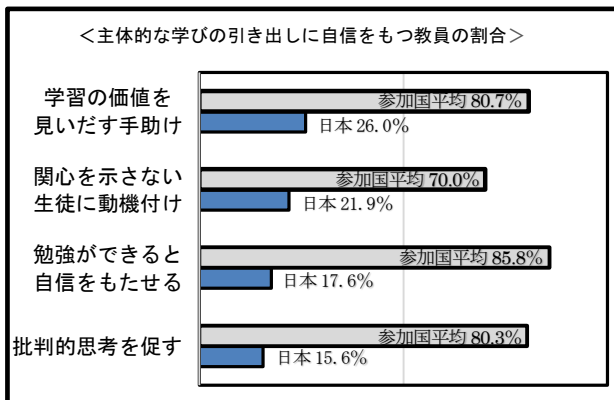
| | | |
|------|---------------------------|--------|
| I | 研究主題と副題 | 1-2-1 |
| II | 主題設定の理由 | 1-2-1 |
| III | 研究目標 | 1-2-2 |
| IV | 研究仮説 | 1-2-2 |
| V | 研究の全体構想 | 1-2-2 |
| VI | 研究組織 | 1-2-2 |
| VII | 研究内容 | 1-2-3 |
| 1 | 研究の基本的な考え方 | 1-2-3 |
| (1) | 「学ぶ意欲」と「学力向上」との関連性 | 1-2-3 |
| (2) | 「学ぶ意欲」の基礎となる「知的好奇心」と「向上心」 | 1-2-3 |
| (3) | 「向上心」の要素となる「有能感」と「自己決定感」 | 1-2-3 |
| 2 | 課題設定の工夫 | 1-2-4 |
| (1) | 知識の共有化 | 1-2-4 |
| (2) | 問題提示の工夫 | 1-2-5 |
| 3 | 有能感・自己決定感を高める指導 | 1-2-5 |
| (1) | 肯定的評価活動について | 1-2-5 |
| 4 | 学ぶ意欲の高まりを見取り、生かす指導 | 1-2-6 |
| (1) | 自己評価の見取り | 1-2-7 |
| (2) | 自己評価の活用 | 1-2-7 |
| VIII | 検証授業と考察 | 1-2-7 |
| 1 | 中学校第1学年 国語科「オオカミを見る目」 | 1-2-7 |
| 2 | 中学校第2学年 数学科「一次関数」 | 1-2-9 |
| IX | 成果と課題 | 1-2-10 |
| 1 | 意識調査の変容と考察 | 1-2-10 |
| 2 | 成果と課題 | 1-2-10 |
| ◇ | 引用・参考文献 | 1-2-10 |
| ◇ | 研究同人 | 1-2-10 |

I 研究主題と副題

学ぶ意欲を高め、確かな学力の向上を目指す指導の工夫
～児童生徒一人一人に自分の考えをもたせる授業づくりを通して～

II 主題設定の理由

OECD「生徒の学習到達度調査（PISA2015）」によると、学習について将来役に立つという生徒の意識は増加しているものの、学習そのものへの意欲が依然として低いままであるということが危惧されている。また、OECDの「国際教員指導環境調査（TALIS2013）」で日本の教員の現状を見てみると、主体的な学びの引き出しに自信をもつ教員の割合が参加国平均に比べて低く、教員にとっても「学ぶ意欲」を高める指導の工夫を行うことが喫緊の課題となっている。【資料1】



また、新学習指導要領においては「育成すべき資質・能力の三つの柱」の一つに「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」が挙げられている。この「学びに向かう力」は、学校教育法第30条第2項に規定される「主体的に学習に取り組む態度」を含意しており、「学ぶ意欲」と大きく関連すると捉えることができる。つまり、新学習指導要領の中でも、「学ぶ意欲」を高める指導の工夫が求められてくることを示しているのである。

【資料1 OECD 国際教員指導環境調査（TALIS2013）】

そこで、本市の実態を捉えるために都城市の児童生徒の「学ぶ意欲」について「平成28年度全国学力・学習状況調査」の分析を行った。その結果、A層（正答率の高い層）に近い児童生徒ほど「学ぶ意欲」が高く、D層（正答率の低い層）に近い児童生徒ほど「学ぶ意欲」が低いということが分かった。また、学習することの大切さは分かっているにもかかわらず、最後まで粘り強く取り組むことができないということも分析結果から見えて「学ぶ意欲」を「関心をもつ」「楽しむ」という「知的好奇心」の視点からだけではなく、内発的動機付けに基づいた「向上心」の視点も含めた指導の工夫が必要であることが分かった。【資料2】



【資料2 平成28年度全国学力・学習状況調査の一部】

この「知的好奇心」と「向上心」から捉えた「学ぶ意欲」を高めるための指導の工夫として、大阪府教育センターが実践された「肯定的評価活動」を取り入れることにした。これは、授業の中で児童生徒を肯定的に評価する取組であり、児童生徒一人一人の考えを教師が認めていくことで、「学ぶ意欲」を高めることができると考えた。また、「学ぶ意欲」を高めるためには、まずは一人一人に自分の考えをもたせるための手立てが必要である。その上で、授業の中で児童生徒が「学ぶ意欲」を高めていくことができたかを教師が見取っていく取組も必要である。

そこで今年度は、一人一人に自分の考えをもたせるための課題設定の工夫、有能感や自己決定感を高める肯定的評価活動、「学ぶ意欲」の高まりを見取り生かす指導の研究に取り組んでいくことで、本市の学校教育ビジョンの達成につなげることができると考えた。

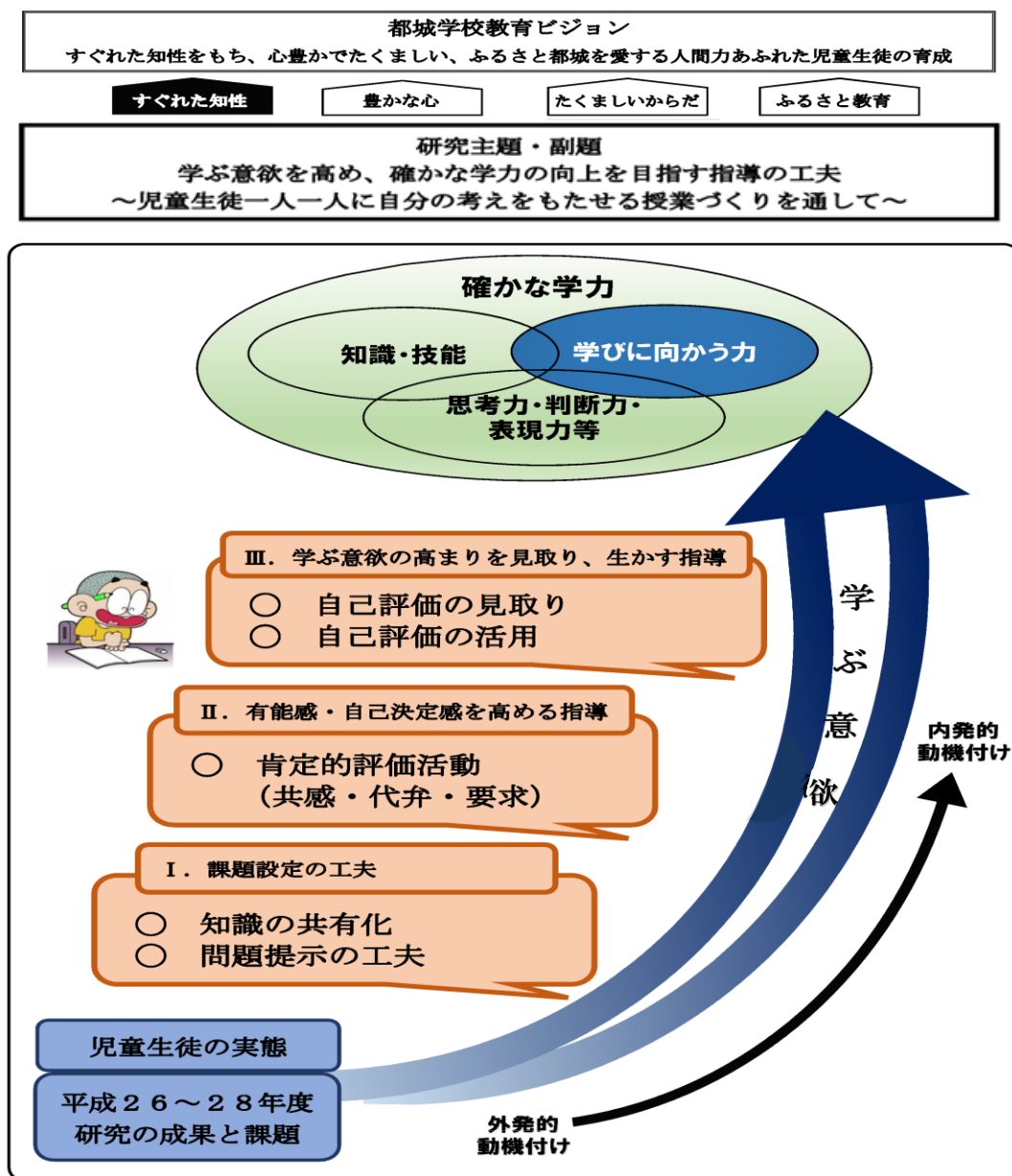
III 研究目標

都城学校教育ビジョンにおいて、児童生徒一人一人に確かな学力を育成するための指導方法を究明していくことが本研究所に課されている。そこで、児童生徒一人一人の「学ぶ意欲」を高める指導を通して、学力を向上させるための手立てを明らかにしていく。

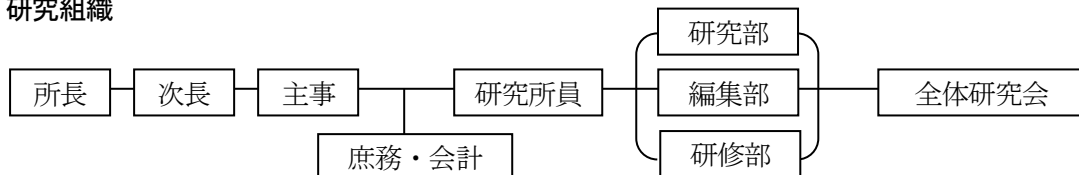
IV 研究仮説

課題設定の工夫によって児童生徒一人一人に自分の考えをもたせた上で、有能感・自己決定感を高める指導を継続していけば、「学ぶ意欲」の向上が図られ、確かな学力を身に付けた児童生徒の育成を図ることができるであろう。

V 研究の全体構想



VI 研究組織



Ⅶ 研究内容

1 研究の基本的な考え方

(1) 「学ぶ意欲」と「学力向上」との関連性

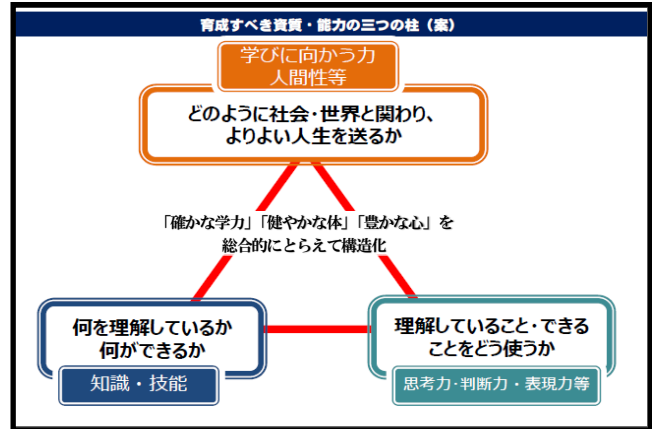
新学習指導要領では「育成すべき資質・能力の三つの柱」として

- ①「何を理解しているか、何ができるか（知識・技能）」
- ②「理解していること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」

が示された。この三つの柱は、確かな学力のみならず、知・徳・体にわたる「生きる力」全体を捉えて整理されたものであり、この三つの力一つ一つを高めていくことが、確かな学力の向上につながると捉えることができる。

そこで本研究所では、③の「学びに向かう力」の部分に着目し、「学ぶ意欲」についての理論研究に取り組んだ。

【資料3】



【資料3】 育成すべき資質・能力の三つの柱

(2) 「学ぶ意欲」の基礎となる「知的好奇心」と「向上心」

新学習指導要領解説（総則編）では、「児童が学ぶことに興味や関心をもつこと」「見通しをもって粘り強く取り組むこと」「自己の学習活動を振り返って次につなげること」などが主体的な学びの実現では重要になると示されており、これらは「学ぶ意欲」の大切な要素と考えられる。また、一人一人に自分の考えをもたせた上で学習を進めていくことは、「学ぶ意欲」を高める上での前提となる。

そこで、本研究所では、一人一人に自分の考えをもたせ、学習を進めていく中での「学ぶ意欲」の高まりを「知的好奇心」と「向上心」から捉えていくことにした。これは、大阪府教育センターの先行実践でも取り上げられている視点であり、本研究所では、「学ぶ意欲」の要素である「児童が学ぶことに興味や関心をもつこと」を「知的好奇心」として、「見通しをもって粘り強く取り組むこと」と「自己の学習活動を振り返って次につなげること」を「向上心」として捉えた上で「学ぶ意欲」を向上させるための研究を行っていくことにした。

なお、今年度は、本主題での研究初年度でもあり、「学ぶことの大切さは分かっている、最後まで粘り強く取り組むことができない」という本市児童生徒の実態から、「学ぶ意欲」を高めるために「向上心」に焦点を当てて研究を進めることにした。

(3) 「向上心」の要素となる「有能感」と「自己決定感」

大阪府教育センターの実践である『学ぶ意欲』を高めるための授業づくり（理論と実践）では、「向上心」を

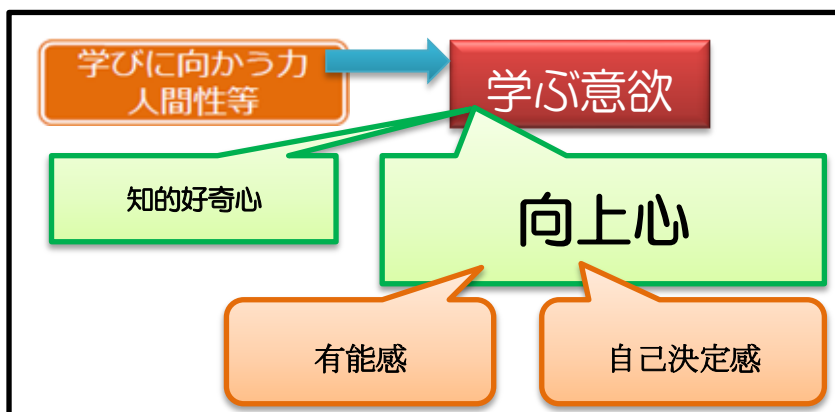
有能感や自己決定感を感じ、自分の有能さを追究しようとする気持ち

と定義している。ここでいう「有能感」とは、“やればできる”“分かってもらいたい”という気持ち、「自己決定感」とは“自分で課題を決めてその課題を解決させたい”“成功させたい”という気持ちである。

つまり、本研究所が高めていきたい「学ぶ意欲」とは、その学習に対して、好きや嫌いと思っているかで「学ぶ意欲」を見ていくのではなく、好きであろうとなかろうと、勉強の大切さ

を認識し、「学ぶ意義」を感じて粘り強く学習に関わろうとしているかどうかを見ていくという捉え方であり、本研究が高めていきたい「学ぶ意欲」とは、「向上心」の方である。

【資料4】



【資料4 学ぶ意欲の分類】

2 課題設定の工夫

「学ぶ意欲」を高める研究を行う上で、自分の考えをもつことができない児童生徒がいることは大きな課題である。そこで、研究の始まりとして、児童生徒一人一人に自分の考えをもたせるために「課題設定の工夫」を行うこととした。

その手立てとして、「知識の共有化」と「問題提示の工夫」の2つの実践を行った。

(1) 知識の共有化

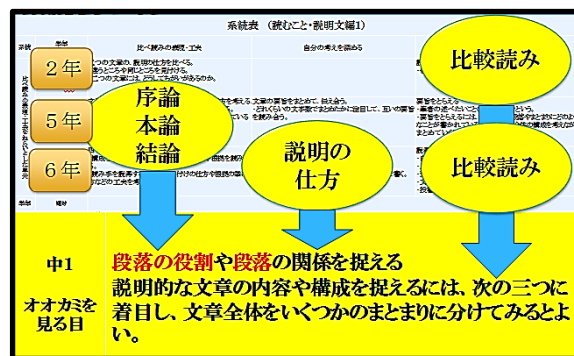
児童生徒が新しい問題に出会った時に、その問題を解くために必要な知識や技能が十分に身に付いていなければ、自分なりの考えをもつことは難しい。学習する単元はどのような系統性があるかを教師が把握し、必要となる知識を児童生徒に共有させることは、自分なりの考えをもたせる上で大変重要となる。そこで、国語科における「系統表を生かした授業改善」と算数・数学科における「既習事項の活用の工夫」を試みた。

ア 系統表を生かした授業改善

国語科における系統表は指導書などにも掲載されているが、ここでは教科書（東京書籍）の単元末にある、単元的主要な学習活動例がまとめられている「てびき」を基にした系統表を作成し、授業改善を試みた。

「てびき」を基にした系統表により、具体的な学習内容のつながりや言語事項等を教師自身が把握することで、児童生徒に共有化させておくべき事項が明確になった。

中学1学年「オオカミを見る目」へのつながりを作成した系統表から見ていくと、小学2学年「ふるしきはどんなぬの」での比較読みの仕方、小学5学年「動物の体と気候」での序論・本論・結論の文章構成、小学6学年「新聞の投書を読み比べよう」



【資料5 系統表による学習内容の系統性】

での比較読みや説得力のある説明の仕方がつながっていることが分かる。学習の中で、このつながりを取り上げて児童生徒に確認したり、問いかけたりすることで、児童生徒自身も系統性に気付き、新しい学習に対する意欲を高めることができると考えた。【資料5】

イ 既習事項の活用の工夫

算数・数学科においては指導書等に掲載してある系統表を活用し、必要な知識の共有化を図ることとした。

単元に入る前だけでなく、単元を進める際にも前時までに学習した定義や定理について、画用紙などにまとめておき、いつでも振り返ることができるようにした。

例えば、小学3学年「三角形」の学習では、既習事項である「円の特徴」や「コンパスのよさ」を単元導入の際に確認し、単元の途中では「正三角形の定義」や「二等辺三角形の定義」などを加えていった。

これにより、既習事項をいつでも振り返ることができるため、常に学習に必要な知識を共有することができ、自分の考えをもつことができると考えた。【資料6】



【資料6 既習事項の掲示】

(2) 問題提示の工夫

児童生徒一人一人が自分の考えをもつことができるようにするために、学習問題をより深く理解させるための提示の仕方を工夫することは大変意義がある。本研究では、昨年度の研究を生かし、「視覚化」「比較」「操作性」「隠す」「具体物」「分割化」の6つの視点で問題提示の工夫を行っていくことにした。【資料7】

| 問題提示 | 方法 | 効果 |
|------|--|---|
| 視覚化 | 問題の言葉の意味が捉えにくいものを、 <u>絵や図にして視覚的に確認</u> させる。 | <u>正確に情報を取り出し</u> 、その場面がどのような場面か想像させる。 |
| 比較 | <u>前時までの問題文や図形などを提示し、比較</u> させる。 | <u>共通点や違い</u> に気付かせる。 |
| 操作性 | <u>教具を用いて、教師や児童が操作</u> する。 | <u>場面理解</u> を促す。 |
| 隠す | <u>問題文の一部を隠して提示</u> する。 | 知的好奇心をくすぐり、 <u>学習意欲の向上</u> や <u>新たな解決方法の発見</u> を促す。 |
| 具体物 | <u>実物等を用意</u> して見せる。 | 学習への <u>興味・関心を高め</u> 、 <u>実生活への広がりや理解</u> を促す。 |
| 分割化 | 複数の文や資料で構成されている問題を一文ずつなど、 <u>部分ごとに分割して提示</u> する。 | 次はどうなるかという、 <u>興味を引き出し</u> 、理解を促す。 |

【資料7 問題提示の工夫】

3 有能感・自己決定感を高める指導

児童生徒の「学ぶ意欲」を高めるためには、有能感や自己決定感を高めるための指導の積み重ねが大きく関わっていくのではないかと考えた。そこで、有能感や自己決定感を高めるために大阪府教育センターが実践された「肯定的評価活動」の実践検証に取り組んだ。



(1) 肯定的評価活動について

肯定的評価活動とは、教師が指導過程における児童生徒の学習活動に対して肯定的に評価していく取組である。学習活動の中で児童生徒に見られる姿に対し、教師が共感したり、代弁したり、要求したりして評価しながら指導することにより、児童生徒の有能感・自己決定感を高めることができると考えた。

指導過程における児童生徒の学習活動は、以下の三つの側面から捉えることにした。

- 情意面 (最後まで取り組もうとするなど)
- 行動面 (大きな声で発表するなど)
- 認知面 (学習内容に関する知識をもつなど)

以下は肯定的評価活動の言葉かけの一例である。

| 肯定的評価活動 | 方法 | 具体的な言葉かけの例 | 授業の様子 |
|---------|--|--|---|
| 共感 | 教師が児童生徒の学習活動の中から価値ある事実を発見し、その事実で共感しながら際立たせ、個や集団に意識させていく。 | 「良いところを見つけましたね。」 「理由まで書けているね。」 「この考えいいね。」等 |  |
| 代弁 | 教師が児童生徒の学習活動の中から価値ある事実を具体的に示し、その児童生徒の取組の過程を紹介する。 | (算数で立式につながる言葉に印を付けている児童生徒に対して) 「〇〇さんは、文章の言葉に印を付けて何算になるか考えているよ。分かりやすくできていいね。」等 |  |
| | 児童生徒の発言や活動の中から、児童生徒自身がうまく表現できなかったり、気付かなかったりした価値ある事実に対し、教師が言い換えたり、気付かせたりする。 | (児童生徒の発言に対して) 「〇〇さんが言ったことは、前に学習したことにもつながっているね。よく見つけられたね。」等 |  |
| 要求 | 教師が児童生徒の学習活動の中から価値ある事実を大切に、次のステップにつながる行動を具体的に要求する。 | (国語で登場人物の気持ちを書くことのできた児童生徒に対して) 「よく書けているね。じゃあ、教科書のどこの部分からそう考えたのかも探してみよう。」等 |  |

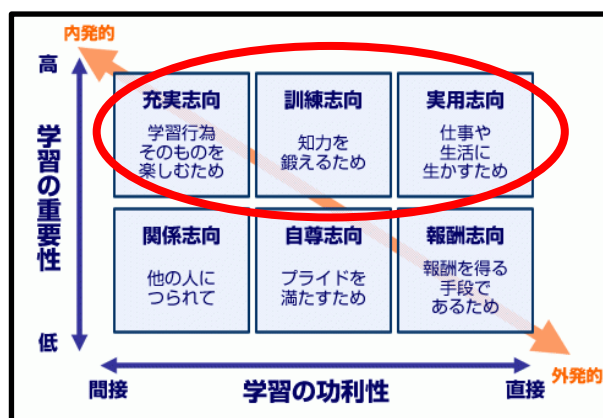
4 「学ぶ意欲」の高まりを見取り、生かす指導

ここまでに行った研究の取組が、児童生徒の「学ぶ意欲」の向上につながっているのかを教師が見取るための方法として、授業の終わりに学習の振り返りとなる自己評価として「今日の学び」を書かせていくことにした。取り組み方としては、次の三つを基本として行った。

- 記述式で行う
- 書く視点を提示する
- 次時の導入段階で活用する

振り返りを書かせる視点を考える上で参考にしたのは、市川伸一氏が提唱している「学習動機機の2要因モデル」である。これは学習する時の動機付けを六つに分類したものである。

このモデルを基に、本研究が目指す「学ぶ意欲」の高まりを見取る視点としては、学習の重要性が高い「充実志向」「訓練志向」「実用志向」と捉えることができる。そこで、「学ぶ意欲」の高まりを見取るための書く視点として、「充実志向」「訓練志向」「実用志向」を提示し、「今日の学び」に記述させていくこととした。【資料8】

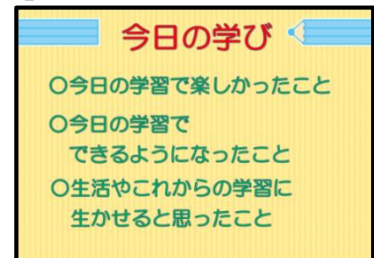


【資料8 学習動機機の2要因モデル】

(1) 自己評価の見取り

学習の振り返りを活用し、「学ぶ意欲」の高まりを見取る手立てとして、書く視点を児童生徒にも分かりやすい言葉に置き換えて提示することにした。書く視点は、「充実志向」「訓練志向」「実用志向」のどの「学びの意欲」が高まったのかを見取ることができるようし、学習活動に対する意欲の高まりを明確に捉えられるようにした。【資料9】

充実志向・・・今日の学習で楽しかったこと
訓練志向・・・今日の学習でできるようになったこと
実用志向・・・生活やこれからの学習に生かせると思ったこと



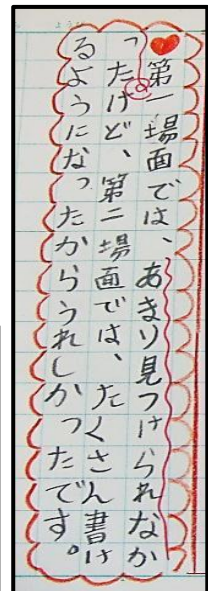
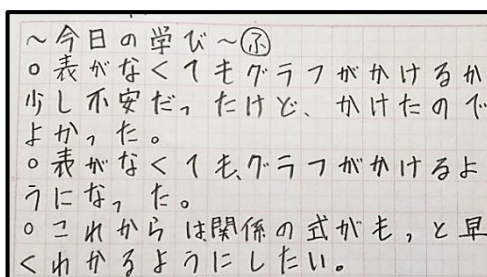
実際に児童生徒が書いた「今日の学び」の例としては、「登場人物の気持ちを場面が進むにつれて見つけられるようになった」という意見や、「比例の学習で表がなくともグラフがかけるようになった」という意見があった。この意見を書いた児童生徒は、どちらも学習を通して「訓練志向」の「学ぶ意欲」が高まっていると捉えることができる。

(2) 自己評価の活用

児童生徒の「学ぶ意欲」を更に高めるために、前時に書いた「今日の学び」を次の時間の導入段階で取り上げていった。これにより、取り上げられた児童生徒は有能感を高め、本時への意欲が高まることはもちろん、紹介されなかった児童生徒にとっては、前時の学習の想起につながるるとともに、どのような視点で学習に参加していけばよいのかの意識付けにもつながっていく。

学級全体での「学ぶ意欲」の向上を目指していくための具体的な方法は、児童生徒が書いた「今日の学び」をテレビに投影したり、教師が提示したりするなどである。

【資料10 国語科「サーカスのライオン」】→



【資料10、11】

【資料11 算数科「比例」】→

VIII 検証授業と考察

1 中学校第1学年 国語科「オオカミを見る目」

本単元は中学校で最初に学ぶ本格的な説明的文章であり、文章構成や展開を捉え、相手に内容を分かりやすく伝えるための力を育成することをねらいとしている。本時の学習では、ヨーロッパと日本の「オオカミ」に対する考え方の相違について、段落の役割や段落どうしの関係をおさえながら読解することで筆者の考えを捉える学習を行う。以下の三つの指導の工夫によって、生徒の学ぶ意欲を高めながら本時の目標達成を図ることができたか検証した。

(1) 課題設定の工夫

本時の学習活動である「段落の分け方や関係を捉える」ためには、どのような知識を共有化する必要があるかを系統表から整理していくと、「序論」「本論」「結論」「要旨」といった学習用語の確認が必要であると分かった。そこで導入において、小学5学年「動物の気候と体」の学習を想起させながら必要な学習用語の確認を行った。また、生徒によって「要旨」の捉え方が異なっていたことも分かったため、「要旨」に



【資料12 掲示物を活用した知識の共有化】

については時間をかけて説明を行い、ワークシートに記入させることで知識の共有化を十分に図ることができた。【資料12】

さらに、問題提示の工夫として、既習の説明文との「比較」(【資料8 問題提示の工夫】6つの視点の一つ)を行った。系統表を基に関連する小学校時の題材「ヤドカリとイソギンチャク」(第4学年)、「イースター島にはなぜ森林がないのか」(第6学年)の挿絵をいくつか掲示しながら、共通点や相違点を読み取らせていった。その上で、「本時の内容では筆者はどのようなことを述べていますか。」と比較を通して要旨を考えさせたことで、普段は間違いをおそれて書こうとしない生徒が自分の考えを進んでワークシートに記入する姿が見られた。系統表の活用と問題提示の工夫を通して、生徒が本時の学習に向かおうとする意欲の高まりを感じることができた。

(2) 有能感・自己決定感を高める指導

展開の個人思考では、机間指導をしながら生徒一人一人に対して肯定的評価活動を行った。根拠となる接続表現や文末表現を一つだけしか見つけられていない生徒がいたため、「よく見つけられたね(共感)。その調子で、他にも似ている言葉や表現を探してみよう(要求)。」と言葉かけを行うと、次々と進んで印を付けていくようになった。

また、グループ活動の場面では段落の役割について発表ができていない生徒がいたため、ワークシートを用いて次のようなやり取り(代弁)を行った。【資料13】

T : 教師 S : 生徒

T 「接続表現や文末表現を見つけれられているね。ところで、この『つまり』の接続表現は、普段どんな時に使っているのかな。」

S 「簡単に言うときです。」

T 「よく分かっているよ。」

じゃあ、これらの説明文の用語で言い換えるとどうなるかな。」

S 「…『まとめ』だ！」

T 「他に、『一方』という表現もあるよ。」

S 「…オオカミに対するヨーロッパの考え方の『まとめ』です！」



【資料13 肯定的評価活動の様子(代弁)】

段落の役割や段落どうしの関係を捉えるという難しい活動内容であったが、生徒の取組や発言から共通点や相違点などを肯定的に評価することで、最初はいま発表できなかった生徒も意欲的に意見交換を行うことができた。

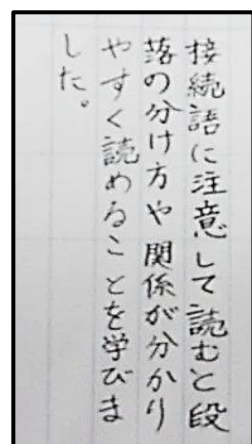
(3) 「学ぶ意欲」の高まりを見取り、生かす指導

本時の学習においてどの学ぶ意欲を高めることができたかを見取るために、ワークシートの最後の欄に「今日の学び」を記入させた。その結果多くの生徒が「接続語に注意することで段落の分け方や関係が分かりやすくなる」などといった意見を書いており、「訓練志向」の視点からの「学ぶ意欲」を高めながら学習することができていた。【資料14】

このような意見を書いた生徒が多かった理由としては、導入で必要な学習用語を全員で共有したことによって生徒が学習に対して取り組みやすくなり、既習内容である説明文と本文とを比較させながら読ませたことによって段落の分け方や関係が捉えやすくなったことが考えられる。【資料14 今日の学び】

つまり、研究の取組によって生徒の「学ぶ意欲」が高まったと捉えることができる。

また、このような生徒のコメントは、次時の授業の導入で読み上げて紹介するなどして、さらに「学ぶ意欲」を高めるために活用していった。



2 中学校第2学年 数学科「一次関数」

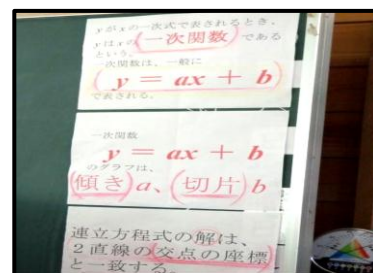
本単元では、身のまわりの具体的な事象の中から一次関数の関係を見出し、表、式、グラフなどを活用しながら論理的に説明することの必要性やよさについて十分に感じ取らせることをねらいとしている。本時は単元のまとめとして、これまで学習した内容を用い、課題解決する問題として「電気自動車とガソリン車の総費用の比較問題」を扱った。（式、グラフを用いて、与えられた情報を読み取り、総費用が等しくなる使用年数を考え、それを求める方法を説明させた。）個人思考、グループでの話し合いの時間を十分にとり、自分の考えをもって課題に取り組むことができるようにした。その中で、以下の三つの指導の工夫によって、生徒の学ぶ意欲を高めながら本時の目標達成を図ることができたか検証した。

(1) 課題設定の工夫

生徒が自分の考えをもつことができるようにするために、カードにまとめた既習事項を黒板に掲示した。本時の「2つの車の総費用が等しくなる使用年数」を求める学習活動においては「一次関数の一般式」「傾き・切片」「連立方程式の解」についてのカードを黒板に掲示し、いつでも振り返ることができるようにした。これにより、展開前段の「10年間の電気自動車の総費用を求める」場面において、立式を苦手とする生徒が、既習事項カードを活用しながら、傾きが充電代、切片が車両価格、変数 x が使用年数になることを理解し、求めることができた。

【資料15】

また、問題提示の工夫として視覚化と資料の分割化を行った。写真や図を活用した視覚化により、問題場面がイメージしやすくなり、課題解決への取組が意欲的であった。さらに、資料を「表」「式」「グラフ」と分割して提示することで、一つ一つの資料の理解を促しながら、次はどうなるかという興味を引き出すことができた。【資料16】



【資料15 既習事項を示したカード】



【資料16 資料の分割化】

(2) 有能感・自己決定感を高める指導

個人思考の場面においては、机間指導をしながら肯定的評価活動を行った。課題解決が途中で止まっている生徒に対しては「式はできているよ」と言葉かけ（共感）を行った上で、「総費用が等しくなるということは？」と問いかける（要求）ことにより、必要な解法に気づき、答えを導き出すことができた。机間指導の中での肯定的評価活動により、数学を苦手としている生徒も自分の考えをもつことができ、その後のグループ協議で【資料17 肯定的評価活動の場面】も意欲的に参加する姿が見られた。【資料17】



【資料17 肯定的評価活動の場面】

(3) 学ぶ意欲の高まりを見取り、生かす指導

「学ぶ意欲」の高まりを見取るために、学習の最後に「今日の学び」を書かせたところ、「LED電球と蛍光灯のどちらを買った方が得なのかをグラフで比べれば分かる」や「携帯電話の料金プランを考える時にグラフを使うと、どのプランがお得か分かる」といった「実用志向」の高まりを多く見る事ができた。

これは、問題提示の工夫によって問題場面を具体的にイメージできていたためだと考えられる。これらの生徒は、日常生活と関連させながら学習に参加できていたと思われる。

Ⅹ 成果と課題

1 意識調査の変容と考察

「学ぶ意欲」に関する児童生徒の意識の変容を測るために、実態調査アンケートを6月と11月に実施した。結果は以下の通りである。数値は肯定的回答の割合である。(↑は5%以上の増加)

| アンケート項目 対象児童生徒は小学校：8校（198名）・中学校：2校（66名） | | 6月 (%) | 11月 (%) |
|--|---|-----------|------------|
| 1 | 問題が出された時、自分の考えをもつことができますか。 | 84.8 | 94.5 ↑ |
| 2 | 今日の問題で、どんな解き方があるかを考えながら取り組んでいますか。 | 86.7 | 90.3 |
| 3 | 授業で分からないところがあったら先生や友達に質問をするようにしていますか。 | 76.5 | 80.3 |
| 4 | 難しい問題があった時も、粘り強く取り組むことができますか。 | 79.2 | 85.7 ↑ |
| 考 察 | ○ 項目1・2について肯定的回答が増加していることは、「知識の共有化」や「問題提示の工夫」によって、児童生徒が自分の考えをもって学習活動に取り組める授業の改善につながったからだと考えられる。 | | |
| | ○ 項目3・4について肯定的回答が大きく増加していることは、「肯定的評価活動」などの取組が児童生徒の最後まであきらめずに学習に向かおうとする「学ぶ意欲」の向上に、十分効果的であったと考えることができる。 | | |

2 成果と課題

| | |
|--------|---|
| 成 果 | ○ 課題設定の工夫についての取組は、児童生徒が自分の考えをもって課題解決に取り組めるようになっただけでなく、既習事項を活用しながら難しい問題でも粘り強く課題解決するようになった。 |
| | ○ 肯定的評価活動を継続したことで、分からないことについては自ら質問したり、じっくりと自分で考えたりしながら課題解決に取り組むなど、児童生徒の有能感や自己決定感を高めることができた。 |
| 課 題 | ○ 「今日の学び」で児童生徒の「学ぶ意欲」の高まりを捉える視点を明確化したことにより、学習後の児童生徒それぞれの「学ぶ意欲」の高まりを具体的に把握することができ、次時の学習へ効果的に生かすことができた。 |
| | ● 既習事項の定着に個人差がある児童生徒に対して、更なる課題設定の工夫を行っていくよう研究していく必要がある。 ● 一単位時間の中で、学級の児童生徒全員を肯定的に評価する時間の確保が難しかった。単元全体を見通した上で、計画的な実践を行っていく必要がある。 ● 「学ぶ意欲」の高まりを見取るための具体的指標について研究を深めていき、より実践に生かせるものにしていく必要がある。 |

◇ 引用・参考文献

| |
|--|
| 文部科学省(2017.3)「小学校学習指導要領」 |
| 文部科学省(2017.6)「小学校学習指導要領解説 総則編」 |
| 文部科学省(2017.3)「中学校学習指導要領」 |
| 市川伸一(2001.9)「学ぶ意欲の心理学」 PHP 新書 |
| 市川伸一(2004.4)「学ぶ意欲とスキルを育てる」 小学館 |
| 藤本武(2003.12)「希望と勇気を育む 肯定的評価活動の発想と工夫」 文芸社 |

◇ 研究同人

| | | | |
|------------|--------|-------------|--------|
| 都城市教育研究所所長 | 鶴木 一郎 | 都城市立丸野小学校 | 川野 泰寛 |
| 都城市教育研究所次長 | 児玉 晴男 | 都城市立志和池小学校 | 金丸 喜紀 |
| 都城市教育研究所主事 | 谷口 千尋 | 都城市立高城中学校 | 木下 喜史 |
| 都城市教育研究所主事 | 野元 政宏 | 都城市立妻ヶ丘中学校 | 杉田 和代 |
| 都城市教育研究所主事 | 日野 浩二 | 都城市立五十市小学校 | 鶴戸 西寛子 |
| 都城市教育研究所主事 | 小野田 武晃 | 都城市立川東小学校 | 森木 奈緒美 |
| 都城市教育研究所主事 | 井手上 和代 | 都城市立菓子野小学校 | 川原 竜馬 |
| 都城市教育研究所主事 | 児玉 直樹 | 都城市立祝吉小学校 | 奥村 瞳 |
| 都城市教育研究所主事 | 馬原 祐介 | 都城市立乙房小学校 | 松崎 航 |
| 都城市教育研究所庶務 | 篠塚 藍 | 都城市立木之川内小学校 | 永井 繁郎 |